



アコリス遺跡出土の皮革製サンダルとブーツ

これらの皮革製履物は中エジプト南部のナイル河東岸に位置するアコリス遺跡（調査団長・川西宏幸筑波大学教授）南地区から出土したものである。南地区は第3中間期から末期王朝時代の様々な手工業生産の存在を示す遺構や遺物に恵まれ、その代表格が前9-8世紀頃の「皮革工房」である。工房址は斜面の中腹に位置し、現在までに東西17.5m、南北5.9mの範囲を確認している。夥しい数の皮革裁断片や製品片が出土し、なかには赤や緑色に着色した皮革片もある。皮革の原材料は主にヤギとウシを用いた。製品のほとんどがサンダルやブーツなどの履物で、その数はおおよその形状が確認できるものだけで100点ほどを数える。さらに、皮革工房址以外の遺構からも60点ほどが出土しているので、操業の隆盛がしのばれる。

古代エジプトのサンダルは、いわゆる草履やビーチサンダルに踵を回るストラップがつく形状をしており、ソールの両側端に切れ込みをいれた「耳」をそなえていることが特徴である。口絵資料（上）は、足の指を掛ける鼻緒と、踵に回るストラップが残存している。また、左側の耳に鼻緒からY字状に伸びるヒモの一部が見てとれる。ソールは3枚の皮革を重ね、周縁部を細い皮革ヒモと獣糸で縫合している。

口絵資料（下）のブーツは、木棺に納置された子供のミイラの頭部下から出土した例である。ソール接地面の摩耗や使用痕がないため、未使用品を副葬したと思われる。古代エジプトのブーツは「耳」をそなえたサンダルの特徴を受け継ぎ、くるぶし付近までの高さがあるアッパーをサンダル状のソールに被せている。本資料も耳を持ち、アッパーの側面に耳から伸びる皮革ヒモが通っている。これは恐らくアッパーの「へたれ」を緩和する処置であろう。アッパー本体は1枚皮革の中央部に切れ込みを入れ、踵部分を獣糸で縫い合わせている。また、開口部が開きすぎないように留めるための「靴ヒモ」も見えてとれる。

サンダルなどの履物は象徴的、儀礼的意味合いが強く、古代エジプト人は裸足で生活していたとされる。ところが、アコリス遺跡で出土する履物のほとんどが実際に使用されており、補修のために別のサンダル片を当てがった資料が多い。口絵資料（上）の左先端部も別の皮革ヒモで補修を行っている。このことは、一般民衆が皮革製履物を日々の生活で使用していたことを示している。その意味で王朝時代の服飾史や生活史に変更をせまる資料である。

（上）長さ21.5cm、幅10.4cm。右足用。

（下）左足：長さ20.0cm、幅8.2cm。右足：長さ20.0cm、幅7.9cm。

花坂 哲（古代オリエント博物館共同研究員）